

▼オピニオン：インフラテクコンを通じた将来の姿（実行委員執筆リレー5） 学びの場としてのインフラテクコン

公益社団法人日本ファシリティマネジメント協会（JFMA）
調査研究委員会インフラマネジメント研究部会
部会長・インフラテクコン 2020 実行委員会委員長
中川 均



インフラテクコン 2020 とは？

「ルールを細かくしてほしくない、自由に考えさせてもらいたい」「授業にはない経験と新たな知識が得られた」「将来の職業選択肢としてインフラメンテナンスに興味があった」これは JFMA「ファシリティーマネジメントフォーラム」（2021年2月19日開催）での最優秀と優秀作品を受賞した、徳山工業高等専門学校、木更津工業高等専門学校の生徒さんたちの声です。

CNCP プラットフォーム公認事業「高専生によるインフラマネジメントテクノロジーコンテスト（インフラテクコン）」実行委員会委員長として、コンテストの開催過程およびリモート・シンポジウムで多くのことを学びました。

- 第1・教育現場では我が国が抱えるインフラの課題について触れる機会が少ない、ことを知りました。
- 第2・本コンテストに参加してくれた生徒たちはインフラマネジメントを自由な発想でマネタイズ（収益化）することに取り組んでいる、ことを知りました。
- 第3・彼らはお互い（企業とのコラボも）の才能・アイデアをシェアして成果を出している、ことを知りました。
- 第4・インフラの課題は我々（サプライサイド）の専売特許ではない、ことを知りました。

教育現場にインフラ課題を！

「鉄は熱いうちに打て」という格言がありますが、専門的な基礎学習と並行して社会的な問題解決能力を身に着けることも重要です。そのためにはまずは問題意識を持つ必要があり、その場としてリカレント教育の現場を地元企業や行政職との情報共有の場として活用すべきではないでしょうか？

四国の某高専の先生は「最初はあまり乗り気ではなかった生徒たちが企業からのアプローチで刺激を受け、俄然やる気を出した！」との声もありました。企業に代表される社会との接点は生徒たちを刺激し、彼らがこの分野に興味を持ち社会に巣立つことは高専教育の付加価値をより高めることになるのではないのでしょうか。

生徒たちの自由な発想はお金を生む！

今回の提案で目についたのは「画像診断」「Ai 活用」「スマホゲーム」と最新技術を活用する技術提案にとどまらず、その先にマネタイズ（収益化）プログラムがセットされていることでした。

住民がインフラメンテに参加するインターフェースとしてスマホゲームを活用し、Ai を活用した画像診断技術をゲーム課金でマネタイズするものが高い評価を得ました。また下水道の分野では家庭の汚水からゲノム解析により健康情報を入手し医薬品メーカーや健康産業にビッグデータとして活用をうながし、その対価を下水道整備事業に役立てる、という大胆な提案が柔軟な発想から生まれました。

才能・アイデアのシェアは新たな成果を生む！

今回のインフラテクコンのテーマは、建設系の生徒たちが主流ではありましたが情報系・機械・化学、それぞれの専門性を持ち寄ってチーム課題に取り組みました。確かに学科は縦割りではありますが、チームづくりはそうではありませんでした。これは指導教官の皆さんが仕掛けた可能性はありますが、高専という教育現場が柔軟な組織とオール高専というマインドを持っているからでしょう。

さらに参加チームの中には企業からの参加を得て、企業目線のアイデアを生徒たちが咀嚼して面白い提案をしてきたチームもありました。これらのチームに対しては企業から継続的な協働の引き合いがちらほらと・・・。

インフラマネジメントはみんなの仕事！

「予算がない」「人材が不足している」という課題を、今回は「だからどうするの？」という所与の条件としてコンテストをスタートしました。だからこそ「それならばこうすればよいのでは？」的なアイデアをたくさん得ることができました。

サプライサイド（インフラサービスの提供側）は「予算の確保をどうすればよいか？」「不足人材をどう確保するか？」ということの内輪で議論してきていましたが、実は「予算が無くて、人がいない」なら「利用者（受益者）と一緒に考えてもらう」という姿勢に欠けていたのではないのでしょうか？高専の生徒たちはこのギャップの越え方を教えてくれています、すなわち「インフラを守ることはみんなの仕事である」という点をあらためて気づかせてくれました。

最後に・・・高専を地域課題解決のハブへ！

このインフラテクコンはコンテストで得られたアイデアを社会実装することを目的にしています。この執筆リレーで、前回の執筆者であるソーシャルテクニカ田村代表からご紹介があったように高専は各地域（都道府県）に一校あります。しかも少数精鋭で最低 5 年間一緒に学び合い地元企業や行政との結びつきが強いため、高専がハブとなって行動することにより地域資源（企業・住民・行政）の結束が図れるのではないのでしょうか？

ここで紹介させていただきますが、公益財団法人日本財団が試行プロジェクトとして 3 校と連携協定を結び本年から活動を開始しています。具体的には長岡工業高等専門学校、福井工業高等専門学校、和歌山工業高等専門学校が、それぞれの地域課題解決に向けて先進的な活動を実施しています。

インフラテクコンが全国の地域課題解決のコンテストとして成長する姿を目指して今後も活動していきます、関係各位からのご支援を今後もよろしくお願いいたします。

